

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 北村久美

環境における情報との出会いに関する研究

本研究は、行為・行動と環境の情報とのかかわりからなる生態学的事象を「きっかけ」と「かまえ」という概念をもちいて記述する環境デザイン理論を構築することを目的としている。それは、建築図面などでは記述できない使い手の行為・行動を記述することによる、使い手側の視点に立った環境デザイン理論である。そのため、環境と動物は相補的であるという生態心理学的観点に基づき、行為の「記述」に着目している。

本研究は7章からなる。

1章では本研究の背景と目的を提示するとともに既往研究の知見を整理した。2章ではテーマとした「きっかけ」と「かまえ」とを定義し、相互の関係について仮説を提示した。3章では回遊式庭園を研究対象とするための検討・考察を行った。4章では回遊式庭園における被験者の1年間に渡る行為・行動の記録を整理、報告し、5章では、描画・発話・観察による総合的分析を通じて「きっかけ」と「かまえ」の具体的、実態的な変化の様子等を考察し明らかにした。6章では、以上の調査検討を踏まえ、特に「かまえ」の変化に着目し、「きっかけ」、「かまえ」、ヒトの行為・行動が相互に連動しながら、新たな「かまえ」が構築されていくプロセスに関するモデルを検討した。これにより、「きっかけ」と「かまえ」は、それぞれ変化しつつ、相互に深く関与し、影響を与えながら、その関係をダイナミックに変化させること、並びにその中でヒトは行為・行動を積み重ねていくことによって新たな「かまえ」を獲得する、さらにその新たな「かまえ」をもって環境の探索を続けるというモデルを示した。最後に7章で研究の総括と展望を述べている。

調査の方法は行動観察である。こどもと共に行動する母親という二組の行動単位を被験者に、一年を通して月に一度、都立小石川後樂園を自由に散策してもらった。ビデオ撮影により被験者の見ている方向・動線・姿勢・発話・利用された場所などが記録され、インタビュー調査・被験者の描画からは被験者の印象に残った場所や出来事、行為・行動のてがかりとしたものが明らかになった。発話の分析を通して観察からは判断できない被験者の思考、感情などが明らかになり、被験者の行為・行動がより明確になった。さらに行為・行動とスケッチマップの関係を分析することにより、本研究の目的である「建築図面などで表現されていない情報」を見いだすことができた。環境の情報としての「きっかけ」、

心身の状態としての「かまえ」、そして、これらの中での行為・行動について、それぞれの関係や変化の様子が観察された。

同じヒトでも環境とのかかわりのプロセスを経て、あるいは社会的・身体的・精神的条件の変化から、環境に臨む「かまえ」は短期的または長期的に変化する。この変化は、実際の行為・行動の体験や新たな発見、その他の場所での生活体験等が相互に関係し影響しあって発生する。また「かまえ」の変化は比較的連続に起こり、フェーズの切替点があることも明らかになった。この切替の要因についても環境の体験や発見による行為・行動の変化や子の成長等、社会的・身体的・精神的要因の変化等によることも観察された。このような変化は、環境が十分に豊かな情報を内包していれば、すなわち「おく」をもっていけば、何らかの契機によってヒトの「かまえ」が大きく変化し、さらに新しい情報の発見がされる可能性があることを示した。

本研究において「きっかけ」と「かまえ」は、それぞれ変化しつつ、相互に深く関与し、影響を与えながら、その関係をダイナミックに変化させ、その中でヒトは行為・行動を積み重ねていくことにより、新たな「かまえ」を獲得し、さらにその新たな「かまえ」をもって、環境の探索を続けるというモデルを示すことができた。

豊かな環境デザインのためには、デザイナーの視点とともに、このように「かまえ」を変化させつつ環境に臨むユーザーの視点も取り込み、さらには、環境やヒトの変化までを見込んだ、複数の視点からのアプローチが重要であり、それにより、ヒトと環境との新たな関わりを創出し、より豊かな環境のデザインを実現させる可能性があることを示した。

以上のように本論文では、使い手の環境とのかかわりを記述することにより、行為・行動と環境の情報とのかかわりを「きっかけ」と「かまえ」という概念をもちいて記述することに成功した。またそのために試みた観察などの調査分析の方法の可能性を明らかにした。

本研究では、図面などでは表現できない環境の情報を記述し、設計の過程の思考ツールとして、使い手側の視点に立った環境デザイン理論の構築への一歩を得ることができたと位置づけられ、それは建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。